

## 全学共通教育についての自己点検・評価報告書（教育部会用）

教育部会名：歴史と文化

部会長名：市澤 哲

作成者名：市澤 哲

## 概要（2000字）

第一に授業内容について。「歴史と文化」教育部会の授業内容は、シラバスから伺えるとおり、バラエティに富んでおり、教員数相応に歴史を学ぶメニューを幅広く受講生提供できていると考える。また、各教員は最新の研究成果に基づいて授業を構成しており、教育の目標を達成するための基礎となる研究成果を反映した内容となっている。教員のなかには教養原論という性格を考慮して、自分の専門からやや離れてはいるが、学生の興味を引きそうなテーマを選んだケースもあったが、このような場合も授業内容についての十分な吟味が行われている。

第二に授業の進め方について。これまでの部会内の情報交換で、「歴史と文化」の授業を受講した学生の多くは、高等学校までと同様、大学の歴史の授業も暗記科目だと考えている場合が多いこと、また、機械的に授業振り分けが行われた1年前期の場合、高校で日本史や世界史を履修していない学生が、単位が取れるのか不安に駆られ、最初の授業終了時にテストの形式について質問に来ることが少なくないことが確認され、このような学生の状況が授業の前提条件であることが共通認識となっている。したがって、学生に対して大学の歴史は単に知識の有無を問うものではなく、歴史的なものの考え方を学ぶことを目標とすることを丁寧に説明し、さしあたり予備知識に乏しくとも授業内容が理解できるよう、説明の手順を考えるなどの工夫が科目ごとになされている。具体的には、パワー・ポイントに画像を多く盛り込み、受講生の興味を高めること、毎回の授業ごとに小テストを行い、受講生の理解度を確認すること、授業中に独自に授業アンケートを行い、授業の改善点を明確にすること、などの取り組みが行われている。とくに、画像を多く使った授業はアンケートにおいても高い評価を得ており、今後とも視聴覚に訴える授業づくりの必要性を確認している。ただし、パワー・ポイントを利用した場合、複数の画面を映し出すことができないため、年表や地図などの時間的、空間的な基礎情報と個々のトピックを結びつけることが困難な場合がある。新しい教育機器を活用する一方で、ハンド・アウトされた資料や、板書を効果的に利用することにも配慮がなされている。

第三に自学自習、単位の実質化の問題。「歴史と文化」教育部会の授業の場合、授業内容に対する理解を深めるには、授業と関連する図書を読むことが最も重要である。授業では、比較的容易に読める参考文献の紹介を随時おこなうなど、自学自習の取り組みを促すとともに、参考図書の募集に積極的に応じその条件作りにも努めた。しかし、現行の図書費は教員の要望を充たすには十分ではないうえに、高額な視聴覚資料もふえている。図書充実をどのように図るかは、今後の課題である。また、考古学担当の非常勤講師が関係する発掘現場に見学を希望する学生をつれていくなど、時間外のフィールド・ワークを実施する試みも見られた。ただし、多くの受講生を抱える授業では実現が難しいことや、教員の負担の問題もあり、授業時間外にフィールド・ワークなどの授業補助を盛り込もうとしたらあ、どのような方法をとるのかも今後の課題である。

最後に現在の問題点をあげる。一つは1年前期の教養原論を機械的な割り振りについてである。先にも述べたように、「歴史と文化」の諸科目への取り組みのモチベーションがかなり低い学生がいることは否めない。やっと高校で嫌な歴史と別れたのに、なぜ大学で強制的に学ばされるのか、という疑問の声も聞かれる。このようなネガティブな姿勢を授業によって変えることができないわけではないが、そういう学生の存在に授業

内容や進行が引きずられることも起こりうる。この形式はそろそろ再考すべきではないだろうか。

二つ目として、TA の時間配分の少なさがあげられる。教養原論の場合、大教室が多く、機材の操作や教材の配布、出席カードや小テストの整理など、手間のかかる仕事が多く付随する。とくに、小テストやアンケートなど学生とのコミュニケーションを密にする作業は、大教室なればこそ必要であるが、作業量は比例して大きなものとなる。現状では配分された時間数を授業で割ると、1 授業あたりわずかに 2～3 回分しか配分できない。TA をより実質的な授業補助として授業に参画させることも含め、充実した制度にすることが望まれる。

三つ目として、授業終了後のアンケート回答率の低さが問題である。この点は昨年の部会の自己点検でも言及したが、現行の回答率ではどこまで結果を一般化できるのか難しいといわざるを得ない。結果、授業中に独自のアンケートを行うことになるが、それがまた、アンケート漬けにされた学生が公式のアンケートを忌避する理由になっているのではないかと危惧する。この点は来年度から実施されるベスト・ティーチャー賞についてもいえることである。学生の視点に立って、彼らが授業評価をどのように眺めているかについても、真摯な検証が必要ではないだろうか。

様式 2 (続き)

## 項目・観点ごとの記述

### 基準 5 教育内容及び方法

5-1-②: 授業の内容が、全体として教育課程の編成の趣旨に沿ったものになっているか。

(観点に係る状況)

「歴史と文化」部会の授業内容は、日本史、東洋史、西洋史、芸術史、科学史、考古学、歴史と現代等、多岐にわたっており、大学の教養課程の授業としての要件を満たしていると判断する。

根拠資料

シラバス、アンケート結果、試験答案。

5-1-③: 授業の内容が、全体として教育の目的を達成するための基礎となる研究の成果を反映したものとなっているか。

(観点に係る状況)

授業内容は、それぞれ最新の研究成果に基づいて構成されるとともに、それらを効率的に伝えられるよう、各種の努力を行っている。

根拠資料

シラバス、シラバスで示された参考文献、授業中配布のプリント類。

5-1-⑤: 単位の实质化への配慮がなされているか。

(観点に係る状況)

授業中に随時参考文献を指示し、授業によっては毎時間小テストを行うなど、自学自習への取り組みを促した。また、自学自習を補う図書を積極的に購入した。

根拠資料

シラバス、小テスト、図書購入申請リスト

5-2-①： 教育の目的に照らして、講義、演習、実験、実習等の授業形態の組合せ・バランスが適切であり、それぞれの教育内容に応じた適切な学習指導法の工夫がなされているか。（例えば、少人数授業、対話・討論型授業、フィールド型授業、多様なメディアを高度に利用した授業、情報機器の活用、TAの活用が考えられる。）

（観点に係る状況）

多くの場合、授業形式をとらざるを得ないが、情報機器、プリント、板書などを有効に組み合わせた授業が行われている。

根拠資料

プリント、パワー・ポイント等の授業資料

5-2-③： 自主学習への配慮，基礎学力不足の学生への配慮等が組織的に行われているか。

(観点に係る状況)

授業中に小テストやアンケートを実施することで、学生の理解度をチェックし、授業に修正を加える工夫がなされている。また、参考文献を提示し、受講生の自学自習の便を図っている。

根拠資料

授業中のアンケート、小テスト、

5-3-②： 成績評価基準に従って、成績評価，単位認定が適切に実施されているか。

(観点に係る状況)

シラバスに成績評価基準を明記し、それに従って成績評価、単位認定が行われている。

根拠資料

シラバス、出席簿、小テスト、レポート、試験答案

## 基準6 教育の成果

6-1-③： 授業評価等，学生からの意見聴取の結果から判断して，教育の成果や効果が上がっているか。

(観点に係る状況)

アンケート結果からは、教育の効果が上がっていることが確認できる。ただし、より評価を上げるために、授業の改善および1年前期の授業割当制度の再検討を行う必要があると考える。

根拠資料

授業アンケート

## 基準7 学生支援等

7-1-②： 学習相談，助言（例えば，オフィスアワーの設定，電子メールの活用，担任制等が考えられる。）が適切に行われているか。

(観点に係る状況)

オフィスアワー、メールアドレスの告知など、学生支援への窓口は広く開かれている。

根拠資料

シラバス、全体アンケート